

## ワイルドの初期の詩について

—‘Theoretikos’を手がかりに

岩永 弘人

(東京農業大学専任講師)

ワイルドの詩作——特に初期の作品——は一般的に低い評価をうけている。彼の初期の詩の集大成とも言うべき *Poems* (1881) に対する大方の批評も否定的なものであった。その要因の1つに、彼の詩がその先達たち(ロマン派の詩人たち、モリス、スウィンバーンなど)の影響を強くうけすぎているという事実がある。しかし、このような積年にわたる否定的な見方には少し修正を加える必要があると思われる。すなわち、ワイルドはその出発点においてすでに、彼の後期の文学活動の萌芽とも言えるような、彼独自の個性を表出させていた。その実証の試みとして、上記の詩集から ‘Theoretikos’ というソネットをとりあげ、少しくわしく見てみることにする。

この強大な帝国は土くれの足しか持たぬ  
古の力強い騎士道に我が小さな島国は  
すっかり見離されてしまった  
どこかの敵が月桂樹の冠を盗んだのだ  
それで丘からは自由を叫んだあの声は  
消えてしまったのだ そこから出てこい  
出てくるがいい わが魂よ お前には似合わない  
この邪悪な商いの館は  
そこでは日々知識と敬意が安売りされ  
粗野な人間が 無知な叫びで激昂しあう  
何世紀にもわたる遺産を敵にまわして  
僕の心は乱れる なぜ芸術と  
至高の文化を夢見ながら 僕は孤立せねばならないのか  
神のためでも その敵のためでもなく

この詩のタイトルになっている ‘Theoretikos’ (瞑想) という語がまさにワイルドの詩的

矢野峰人(禾積)博士が5月22日永眠された。90才の今年2月、10年に亘る連載の「古今東西文苑散歩」を一卷にまとめた『飛花落華集』(吉田正俊編 北星堂)を上梓され、現役の学者であられた。本協会創立に際しては、心からの助言と祝詞を頂き、爾来十余年、顧問として5月14日の理事会出欠のお返事迄几帳面に頂戴するという、文字通り本協会の歩みを見守り続けて下さった大きな支えの柱であった。

三高より京大英文科に於て上田敏に師事しその学風を体得され、英国留学中は W.B. Yeats や Lady Gregory, Symons, De la Mare 等の詩人達と交遊があり、Dowson, Wilde, T.S. Eliot 論を含む『近代英文学史』、『近英文芸批評史』は、英文学研究者必携の書である。詩集に『黙禱』、訳詩集にベルシャの Omar Khaiyam, ベルギーの Rodenbach, そして Symons 等があり、上田敏、蒲原有明、日夏耿之介論、とその学識は古今東西に及び、その学風は細心精緻で诗情溢れ、文字通り偉大な比較文学者であられた。巨星墜つ——感謝の念と共に、心よりその冥福をお祈りする。(井村君江記)

態度の表明であるように思われる。それは、この現実の世界とは遊離したところで勝負しようという態度であると言ってよい。そしてこの詩全体が、彼の心のゆれと、その結果最終的に彼の心に立ちあらわれてくる決意を示している。

冒頭の部分で彼はまず帝国主義あるいは騎士道への憧憬を述べ、それが失なわれてしまったことを嘆く。古の時は、戦と素朴さの時代であったことはもちろんだが、同時に文芸の栄えた時代でもあったわけで、ワイルドはこの古きよき時代をあこがれつつ、不毛な現代への批判を述べる。つづいて彼は魂への呼びかけをはじめますが、この魂は、自らの魂であると同時に、もっと汎芸術的なものをも含めているように思われる。その魂に対して彼は、いわゆる商業主義的なものを避けろ、いいかえれば、芸術の切り売りを避けろ、と訴えかける。そしてこの詩の最後の部分では、彼の詩人としての態度が明らかにされる。それには大きくわけて2つのポイントがある。1つは、彼が「芸術」や「至高の文化」を守るために自ら孤立することを辞さないということであり、今1つはそれが「神のためでもなく、その敵のためでもない」、つまり自己の魂のためであるというのである。

文明、大衆と対峙して、美の中に身を投じようとするワイルドの態度は、彼の講演やのちの作品群にもあらわれてくるが、このような立場は、この初期の詩の時点ですでに確立していたと言ってよい。そしてワイルドのこのような詩的態度は、ロマン派の詩人たちと現代詩人たちの間の過渡期に位置づけることによってますます興味深いものになってくる。